東京カテドラル聖マリア大聖堂（撮影：山田新治郎）

特集

昭和建築の系譜

レトロとモダンの視点から昭和の建築を語る

昭和改元から間もなく100年を迎える。
戦前から戦後へ、そして高度経済成長期を経て日本が飛躍的な発展を遂げた「昭和」。その時代に憧憬を抱き、背景に流れていた多様なカルチャーを懐古する空気が広がっている。
建築も時代のすう勢に呼応し、変遷を続けてきた。関東大震災からの復興に始まり、世界大戦の敗戦を乗り越えた驚異的な再生、そして異様な熱気を帯びながら平成へ、建築は変わりゆくこの国の風景を形づくってきた。
「昭和」とはどのような時代だったのか。建築史家・倉方俊輔氏とともに、「レトロ」と「モダン」という視点を糸口に、昭和建築を概観する。その先に令和の建築が進むべき道が見えてくる。

文：槌田波留基

1921年にフランク・ロイド・ライトが設計した学校建築、自由学園明日館。左／食堂の椅子とテーブルは、弟子である遠藤新のデザイン。右／前面の幾何学的な装飾の大きな窓が特徴（撮影：山田新治郎）

建築のレトロとモダン

―はじめに「レトロ」と「モダン」という視点から昭和の建築を見直したいのですが、その観点について整理していただけますか。

「レトロ」とはレトロスペクティブ、つまり過去を振り返るという意味があります。専門的な用語ではなく、雰囲気で使うことが多いですよね。その対象がこれまでにどのように存在していたのか。建築でいえば、例えば銀行や学校はどのようなあり方をしていたのか、その「らしさ」に則ってつくられた建物を、レトロと評価できるでしょう。一方、「モダン」はまさしく「たった今」という意味合いがある。「らしさ」や「過去にどうあったのか」を忘れて、新しいものをつくろうとする。現在を見据える建築がモダンです。

モダン建築は、機能性や経済性、合理性を突き詰めた建築様式ですが、私はモダニズム（ｍｏｄｅｒｎ－ｉｓｍ）建築という言葉はあまり使っていません。「イズム」である限り、そこに「主義」が介在する。モダン建築は主義主張ではなく、新しいものを生み出そうとする現象そのものとして捉えられるべきだと考えています。もっとリラックスして昭和の建築を見ていきましょう。

―明治・大正から戦前までが「レトロ」、戦後に始まるムーブメントが「モダン」という見方もあります。戦前と戦後、日本の建築は第二次世界大戦を境に大きく変遷したといわれていますね。

昭和の建築は関東大震災の復興が起点になります。戦前は、明治・大正期から受け継がれてきた石造や煉瓦造の品格をもった「らしさ」を踏襲して、建築のカタチを決定する時代でした。そこに、火災や地震に耐えうる鉄筋コンクリート（ＲＣ）の技術が急速に普及します。石材や煉瓦は構造を制約しますが、ＲＣはラーメン構造の躯体に、自由に意匠をまとわせることができました。建築家の腕の見せ所です。西洋風の建物に日本風の屋根を載せた九段会館をはじめとする「帝冠洋式」といった建築も登場しました。戦前は、日本の建築が自信を得て、西洋一辺倒ではないスタイルの広がりを見せた時代です。

ポストモダン建築。左／磯崎新が設計した北九州市立美術館。右／石井和紘＋難波和彦が設計した54の窓（いずれも提供：倉方俊輔氏）

1934年に、昭和天皇の御大典を記念して建てられた旧九段会館。西洋風の建物に瓦屋根を載せた帝冠洋式の外観が特徴。登録有形文化財である建物を、一部保存しながら建て替え、2022年に九段会館テラスとしてオープンした
上／保存・復原した正面エントランス
下／昭和初期のモダニズムを感じさせるバンケットルーム
（いずれも提供：東急不動産㈱）

戦後に始まる新しい建築

―レトロから更に自立した日本の建築が勃興したところで、日本は終戦を迎えます。

敗戦を経験した日本は、戦前の国のあり方について反省を始め、より合理的かつ科学的な考え方に変遷しました。戦後の建築はそうした背景を踏まえながら、戦災復興から始まります。

この時代にキーワードとなるのが「国際」という言葉です。あらゆる分野で、戦後復興を超えて国際社会に復帰しようとするムーブメントが時代の潮流になりました。その頂点となったのが、一九六四年の東京五輪や一九七〇年の大阪万博です。建築界においてもモダン建築が主流となり、世界の建築に影響を与える建築家が登場しました。その先端を走り、日本のモダン建築をけん引したのが前川國男や坂倉準三、丹下健三らです。建築はＲＣの飛躍的な進化によって「新しい構造が新しい空間を生み出す」ことを体現し始めます。東京文化会館や東京カテドラル聖マリア大聖堂、国立代々木競技場の第一体育館などはその象徴。複雑かつ自由な形態は、世界的にも注目を集めました。そうした建築は、日本が国際社会に復帰したことを見事に証明してみせました。

その後、七〇年代からポストモダン建築が世界的に提唱され、日本でもそうしたスタイルが姿を現しました。ポストモダンは反モダンとして語られることが多いのですが、必ずしもそうではない。ポストモダン建築はモダン建築の延長にあり、更に拡張していった潮流。多様性に回答しようとする志向もあります。単純な対立構造で説明できるものではないでしょう。

―「敗戦」が昭和のその後を占う分岐点になったということでしょうか。

敗戦で日本は、依って立つ基盤を失いました。それを今後は「つくるしかない」という国民的な総意が

倉方 俊輔

Shunsuke Kurakata

東京都生まれ。大阪公立大学大学院工学研究科教授。建築史の研究や批評に加え、「東京建築祭」実行委員長、「イケフェス大阪」「京都モダン建築祭」実行委員を務めるなど、建築と社会を近づけるべく活動中。『東京レトロ建築さんぽ』『東京モダン建築さんぽ』（以上、エクスナレッジ刊）『東京建築みる・あるく・かたる』（共著・京阪神エルマガジン社）など著書多数

丹下健三が設計した東京カテドラル聖マリア大聖堂。モダン建築の黄金期を代表する教会（撮影：山田新治郎）

あったのだと思います。更に明治維新の時のような、「国際」は西洋文化だけに由来するという価値観は既にありません。アジアを含めた本来のインターナショナルの概念が生まれていました。制度や憲法が整備されていても、お城のような建築物しか建っていなければ、この国とは対等に話ができないと世界的に判断されます。建築はそうした評価軸にもなっていました。

建築は、日本的でありながら国際的なもの、その両者に共通する事項を求め始め、建築家はその要請に応えようとします。社会的に「つくってもいい」雰囲気があれば、多様な表現を駆使して新しい建築を目指す。モダン建築においても機能性のなかに抽象的な表現を取り入れて、アートとは異なる地平で斬新な創造に挑んでいました。

メタボリズムの象徴とされる中銀カプセルタワービルにしても、機能性だけを重視するのであれば、カプセルがランダムに取り付けられる必要はなかった。設計した黒川紀章は、建物を機能的に見せながら未来的に「表現」しようとしていた節があります。どうすればカッコよく見えるか、それを考えることも建築家の仕事なんです。

「夢」がけん引する七〇年代の建築

—戦後から高度経済成長期を経て、七〇年代に入るとまた新たな「昭和」のイメージが生まれたように思えます。

確かに七〇年代は世界的にも激動の時代といえますよね。ベトナム戦争や学生運動、オイルショックといった出来事に対峙して、今までの社会の仕組みは欺瞞だったのではないかという疑いが芽生えました。日本は「国際」がキーワードだった時代が終焉し、国際的な視野から個人の営みへ、国内や身近な環境で起きる事象に対する関心が高まっていきます。「ディスカバー・ジャパン」や「アンノン族」といった惹句が象徴的でしょう。

建築も巨大な建築物だけではなく、小規模な対象でも過去のモチーフを復活させようとする方向に動きます。例えば個人住宅において、伊藤豊雄や安藤忠雄が建築の多様性に応えようとしました。建築物に従来とは異なる価値を付与する試みは、謎めいた軽やかさを感じさせる建築を生み出していきます。

—昭和初期から敗戦を挟んで後期にいたるまで、建築が熱気を失うことなく創造を続けることができた、その原動力はどこにあったのでしょう？

昭和には「夢」を見る余地があったのではないでしょうか。初期にはアジアの盟主になるという夢をもって、日本らしい様式を取り入れながら西洋に伍していこうとする帝冠様式があった。戦後はゼロからつくることになって、国際的な舞台に復帰することを夢見ていた。日々進化する技術と強い意志をもって、従前とは異なる社会をつくることができるという、まだ見ぬ社会への夢が昭和を貫いているように思えます。

一方で、今はその夢が希薄になってしまった印象があります。昭和に対する憧れを感じる背景には、そうした感覚が働いているのかもしれません。夢のあり方が多様化しているともいえますが、機能を満たし安全安心を担保していれば、そして社会的な意義を満たしていれば、否定されることはないだろうという動機から建築が始まっている。ある意味新しいものをつくろうとする勇気が失われつつあるようにも思えます。

—その夢や勇気を取り戻すために建築はどうあるべきなのでしょう？

建築は社会のものです。日本が、あるいはわがまちが、建築を通してどのように見られているのかを意識しなおすことが重要だと思います。

丹下健三が設計した国立代々木競技場。世界で初めて鋳鉄を構造材に用いるなど、構造とデザインがハイレベルに融合している（撮影：山田新治郎）

撮影：archipicture 遠山 功太

撮影：archipicture 遠山 功太

黒川紀章が設計した中銀カプセルタワービル。1972年に売り出されたわずか10㎡のマンションは惜しくも解体されたが、2基のカプセルはアート&カルチャースペースSHUTL（シャトル）として再活用されている（上下提供：松竹㈱、右写真：大橋富夫）

その建物は、地域の伝統や歴史を表しているのか、この国の未来のイメージを指し示しているのか。建築は社会のものである限り、多くの人の眼に触れ、費用対効果も含めて評価の対象になります。建築家が自我だけを中心に据えてつくるべきものではありません。住宅ならその人らしく、庁舎ならばそのまちらしく、そして建築が集積する都市景観ならばこの国らしく。社会がどのように見られたいかを読み取ってカタチにすることが、建築に改めて求められているのではないでしょうか。

建築の課題はそうした社会、外側から提出されます。建築の内側から課題を抽出しようとすると、課題そのものが枯渇してしまうでしょう。社会的な要請が尽きない限り、課題がなくなることはない。そこに建築の永続性があります。

これからの建築はどこへ向かうのか

―例えば日本は現在、人口減少という大きな社会的課題に直面していますが、建築として回答することはできるのでしょうか？

昭和は人口増加を前提として投資がなされていましたが、今後は人口が増えていくことは考えにくい。一方で一人当たりが享受できる面積は増えていくことになります。余裕のある豊かな環境になることも期待できるでしょう。そうしたことを念頭において、今よりも優れた建築に置き換えていくことになると思います。建物を残したり改修したりすることがスタンダードになりつつありますが、これからの建築は保存やリノベーションでは実現できないことに挑んでいくべきでしょう。例えば、谷や崖で断絶されたエリアをどうすれば接続することができるのか、土木的な要素も包含しながら、技術をバックボーンとして回答することは可能だと思います。

それでも地域や社会にどのように判断、評価されるのかといった視点はやはり欠かせません。広場が真ん中にあるJR博多駅、近代的な市街と歴史に育まれた杜の都である仙台、そうした視点を軸としてつくられた建物や都市が、その地域を語り続けることはとても大切なことです。JR大阪駅周辺で展開する大規模再開発、グラングリーン大阪も次世代の大阪らしさを創出しようとする挑戦です。既にオープンしたエリアでは、噴水で子どもたちが大はしゃぎしている。大阪がもつエネルギー、大阪人の余裕の表れかもしれません。場所を使いこなすセンスを感じます。もともと潜在していた「楽しみたい」という欲求を浮上させる力が建設にはあります。

当然、都市計画の課題をいかにクリアするのかが課題になる。行政も安全性の担保やステークホルダーとの合意形成など、専門部署が横断的に連携することが求められます。建築も単一の技術だけではハードルを越えることが難しいでしょう。それでも多様な技術を総動員して、行政と強固な連携を構築することは可能だと思います。

―施主、発注者（クライアント）の意識変革も求められるかもしれません。

昭和の建築は、その意匠や構造が目に見えるものなので「建物」だけが注目される傾向がありますが、その背景にはクライアントの勇気ある

左／ JR博多駅広場（撮影：中原一隆）。右／仙台の街並み

梅田貨物駅跡地の再開発で2024年9月にオープンした、都市公園併設型の複合商業施設グラングリーン大阪。オープン初日は気温も高く、水遊びをする子どもたちで賑わいをみせた（提供：UR都市機構）

英断がありました。自社ビルにしても、行政の庁舎にしても、自社のあるいはわがまちの個性の表出、ブランディングに向けてクライアントは覚悟をもって真剣に向き合っていました。今はそうした気概が失われているように感じることがあります。個人住宅の施主にしても、人生で一度のわが家の普請には並々ならぬ熱意をもっているはずです。同様に建築物の発注者も建築家や施工者、デベロッパーに依存するだけではなく、自ら考え抜くことが重要です。そのうえで関係者と連携して意見を戦わせながら、建築物をつくりあげていくべきだと考えています。

今春開催される、建物の見学を通してまちの魅力を再発見するイベント「東京建築祭2025」で私は実行委員長を務めていますが、この催しではクライアントにも多く参加、参画していただきたいと考えています。建築の楽しさや意義を、クライアント目線で改めて感じていただきたいと願っています。

―そもそも「昭和」とは。先生は昭和にどのようなイメージをもっていますか？

見た瞬間、触れた瞬間に心を揺さぶられるような対象が、次から次へと登場した時代だったのではないでしょうか。理性よりも身体的、情動的な動機をもって、そうしたモノやコトにかかわっていたように思います。その背景にはやはり「夢」がある。夢をもつことで体温が上がるような感覚がありました。建築も然りです。社会と人を信じていた、その活力のようなものを昭和からもらって、令和の文脈で実践していけばいい。新しい建築を実現できれば、必ず社会から共感を得ることができるはずです。

東京建築祭2024の様子。2024年5月の週末2日間、普段は公開されていない建築の無料公開やガイドツアーが開催され、延べ6万5,000人が訪れる大イベントとなった（提供：東京建築祭）

レトロを味わう建築

日本橋三越本店

1）正面玄関のライオン像が来訪者を出迎える。2）屋上の金字塔。3）内部の豊かさが溢れ出したような装飾。4）創建当時の外観（提供：㈱三越伊勢丹）

西洋に比肩する百貨の殿堂

百年超の歴史を誇る、日本における百貨店の嚆矢である。日本橋三越本店は、後の三井財閥の基礎を築いた三井高利が一六七三年に創業した「越後屋」が起源。現在の建物は一九一四年に竣工、以来、増改築を繰り返しながら現在の威容を保ち続けている。

「一階から五階の吹き抜けホールが壮観です。一九世紀のパリで生まれた百貨店は、当地の紳士淑女を魅了しました。日本橋三越本店は、日本で初めてパリに肩を並べた百貨店です」と倉方氏は話す。

一九二三年の関東大震災で被災したが、翌年から工事に着手し、一九二七年に竣工。鉄骨と煉瓦造の五階建ての旧店舗は、延焼を免れた鉄骨や床スラブを活用して、七階建てのSRC造として再生した。その後も増改築が行われているが、重要文化財の指定を受ける本館の東側と北側の外観は、今も当時の姿を受け継ぐ。倉方氏はそのすべてが、昭和初期の建築技術の集大成だと評価する。「当時最先端のSRCによって、視覚的にも抜け感のある空間を実現しました。意匠も昭和の建設技術を総動員して西洋や中東、当時流行していたアール・デコ調など、世界の多様な様式を混合している。にもかかわらず、全く違和感を感じさせません。明治から昭和初期に進化した、わが国建築の完成版といえる建物です」。

二〇一八年、隈研吾氏の環境デザインにより、内観は本館一階を中心に「白く輝く森」をイメージして改装された。歴史を感じさせる重厚な建築物の内部に柔らかな光を放つ森がある。もはやショッピングを楽しむだけの施設ではない。日本初のエスカレーター、国内二例目となるエレベーター、アンモナイトの化石が隠れる大理石の壁面。館内を巡るごとにレトロな感覚に包まれる。「人々が求める非日常に対する憧れを受け止めている建物。昭和初期のワクワク感が、今でも体験できる素晴らしい時間と空間を提供してくれます」と倉方氏。常に最先端の意匠を取り入れ、様々な様式が融合する日本橋三越本店に、足を運んでみてはいかがだろうか。

5）吹き抜けに立つ高さ約11mの天女像。6）採光天井。7）吹き抜けに面した異なる絵柄のパネル。8）手すりは幾何学的なアール・デコ調。9）東洋風の天井装飾

10）内階段の木製手すり。11）意匠性の高い照明器具。12）大理石の中にはっきりとわかるアンモナイト。13）エレベーターの装飾。14）レトロなエレベーター

撮影：特記以外は中原一隆

モダン建築の静かな挑戦

新東京ビルヂング

1）東西南北に走る共用通路。天井に幾何学的な照明器具が灯る。2）手すりの装飾。3）外部との境をモダンな全面ガラスにすることで碁盤目の街路を引き込んでいる

4）横一列にシャープなガラス窓が並ぶ外観
5）シャープさのなかに角丸の温かさもある

街路を取り込んだオフィスビル

オフィスビルの中で街路が交差する。丸の内に佇む新東京ビルヂングを訪れるとそんな感覚に捉われる。竣工は一九六三年。地上九階、地下四階、RC造のこの建物は、高度経済成長期を象徴する複合オフィスビルの一つだ。横連窓や過剰な装飾を排除した外観は、モダン建築の源流を受け継ぐ。機能性を追求しながら一方で内装には人を迎え入れ、快適なひと時を過ごすための工夫が随所に施されている。建設当時は厳格な高さ制限があり、階数を増やすために階高が低く設定された。その圧迫感を抑制する試みとしてオフィス街の街路をそのまま建物に引き込もうとするコンセプトがあったという。倉方氏はこう説明する。「街路を建物に引き込んで、建物の中に街並みをつくっています。現在よりも、都市と建物の密接な関係性を重視している。壁面にモザイク画を施したり、丁寧につくられた一品生産の手すりを設えたり。公共性を考慮した戦後の民主的なビルを建てようとするクライアントの意思が強く感じられます」。

オフィスビルである限り不特定多数の来街者が自由に往来できる構造は、保安上の課題が少なくない。しかし、この昭和の建築にはそうした判断が希薄な印象がある。「現在よりも社会を信じていたのだと思います。社会に期待と夢を抱かせる建物であれば、人々に喜びを与えることができ、一般大衆が建物を通り抜けても大丈夫なのだと。機能的でありながら素材感を生かし、ぎりぎり装飾的な意匠を施したことも、そうした民主的な発想によるものだと思います」。令和の建築も社会と人を信じるべきだと倉方氏は指摘する。

所有者である三菱地所グループは、二〇二〇年代における丸の内エリアのまちづくりを「丸の内NEXTステージ」と位置づけ、リニューアルプロジェクトを進めている。新東京ビルヂングも順次改修中だ。そのコンセプトは「人を惹きつける新東京ビル」。オフィスワーカーだけではなく、すべての来街者に開かれた楽しめるビルを目指している。

6）1階エレベーターホールの壁面には矢橋六郎作のモザイク画「彩雲流れ」が施されている。7）2階エレベーターホール。階高の低さをスリットの照明が緩和している

8）曲線をもった金属の手すりは、意匠性もさることながら、手にやさしくフィットし機能性も高い。9）エレベーターホール脇の石張りの階段

撮影：中原一隆